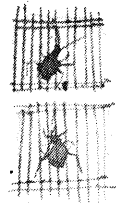


愛珠

想い出ずるままに (十六回)



中村道子

一 父の日を創設する

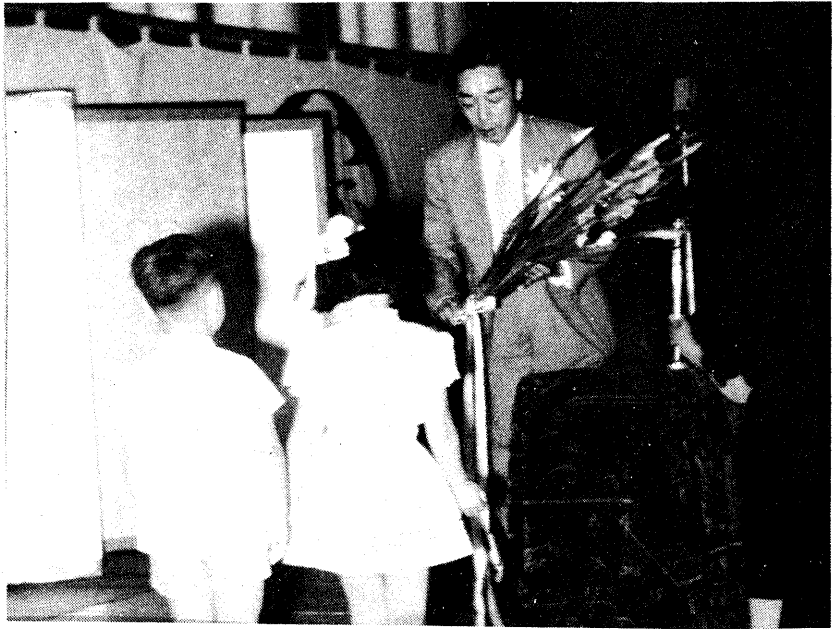
昭和廿七年の四月に入園して、いつも妙子さんと呼ばれている女の子が、無邪気な笑顔を私に向けて、「きのうはお母さんありがとうの日でしたな!!」というから、私は「そうでした!!」お母さんに、カーネーションの花をあげましたか」と尋ねると、「あげましたら、えらい喜びはりました!! 『綺麗な可愛い花やなあ!!』というて、胸にさしはりました」

「先生!! お父さんありがとうの日はいつのですの?」お父さんの、来られやすい日にしましょう」「お父さんには何の花をあげましょうか」何の花がよいか、皆で考えてちょうだいな」そうや!! 皆で相談しましょう」それでほかの幼児たちにも話すと、喜んで賛成したので、日時や贈物の花を、子ど

もたちで決めるように約束して今日の会集を終えた。

この日から数日が過ぎた朝会の時、一年保育の年長組の幼児らが「先生この間、父の日をいつにするか皆で考えたときなさいと、いいはったでしょう!!」それで皆で考えて、六月の三番目の日曜日がいいといひ合いました!!」そうでしたか!! それからお父さんにあげるお花は何になりました?」皆はいろいろな花をいひましたが、五月の節句に菖蒲の花を人形に供えたから、あれならたたみ方で習ったからあげられるわ!! 菖蒲やったら中の組でも折れるし、一番小さい組には、僕らの大きい組が折って作ってあげたらいいわ」といひました。そして早速この日から、父の日の準備が始まった。

菖蒲の花のたたみ方のむずかしい所が一個所あった事をよ



く知っているから、誰にでも強いてせず、楽しく父を思う想像の中に、思いをこめさせて自由な気持で当たらせた。花も始めは濃い紫色が多かったが、その中にたまたま薄紫や黄色の姿も見えて楽しかった。しかし白色を見なかった事は、不幸の友の無い事を知っているからだと思ひ、わざと質問すると「白色をあげるようなお友だちがありませんから——」と笑ってしまった。

父の日の次第として書かれた園長の挨拶には、幼児の要望から今日の会が生まれたもので、一同が拍手賛成した事を話し、今日父への贈物の菖蒲の花は、年長組はもとより年少組も、皆喜んで熱心にたたんだ事を話すと、お父さんたちもここにこほえんでおられた。ついで父への感謝の歌は、母への感謝の歌から曲をもらい、歌詞もお父さんのに作りかえて、喜びと感謝の意を表わした。そして父の代表になってもらった教育長には、菖蒲の花束を正面の台の上で、代表の子どもからうけてもらった。

二 清水多嘉示作「植樹」の塑像を玄関脇に置く

昭和二十七年九月のある日、私は放課後校長講習会に出かけた。土佐堀川にかけられている梅檀の木橋を渡り、中の島公園に出て剣先の方を少し遠くまで眺めると、芝生のくさむ



らや木立の影に、おのおの所を得て美しいいろいろな塑像が配置されてあった。いずれを見ても美しくきりが無い。しかし、「そうだ講習に遅れるといけない!!」と思い、心を残しながら講習会に向かった。

帰りみち再び公園に戻ってさっきの続きを見たが、植樹の像の前で立って二、三回まわって見た。何度まわって見ても、「この像は愛珠幼稚園にほしい」と思った。

いま、愛珠幼稚園の正門前に、大きく育っている大山木も、二葉のころにはこの植樹の像の苗木ぐらいの大きさであったろうに、数十年余をへて現在のように大きく育って、屋根をおおうほどに成育している。真夏には誰もが木影にしたい寄って行く。そして像の苗木のような、愛珠に集まる幼児たちも大きく育って、いろいろな友と手を取り合って、相互に成長発展して行く姿を想像して、ぜひ愛珠のものになってほしいと、その像にいいながら、愛珠幼稚園に帰ってきた。

それから私は決心して、作者の清水先生に直接手紙を出してお願した。

折返して清水先生からの返事を受けた。軽い封筒の中には一枚の便箋が入っているのみであったから、私はちよつと不安を感じたが、文面には「子どもたちの育成のためという気

持ち」を察して、おゆずりする事としましたとの許可が書かれていた。「植樹」は愛珠にくださったのだ、愛珠の物になったとうれしかった。玄関脇の前庭をうるおわせる事だろう。それに大山木の青葉に映えて、緑の庭になるだろう。ついで私は当て所もなく空を見るように考えた――。

植樹に寄せる詩はPTA役員の方が竹中郁先生に紹介して下さった。それは、

あたたかな

ひかりにあてて

きよらかな

水をそそいで

の四行の詩であった。そして文意の部には、パネルに入る字の美しさ、誰にでも読みやすく、植樹している女の心の中のつぶやきとして、作詩したとのご親切なご留意が書かれています。

さあ!! 植樹は愛珠の物になり、植樹に寄せる詩も、得られたが、この際、丈四、五尺の海棠かひど一株を、像のうしろに植えて、園名「愛珠」との機縁の表象として、ぜひ添えたいとの意をいっそう強くした。

それは私が、この愛珠幼稚園に赴任して来た時、この愛珠幼稚園の園舎が、普通の園舎と建築が違って、玄関から園舎全体の構想が、ご殿ふうであったから、着任すると間もなく創設者滝山瑄氏が記録せられたという沿革史を一気に読んだのである。この沿革史の中に綴られていた園名の撰択には、当時大阪市で漢学者として屈指の藤沢南岳先生に師事していた愛珠創設者四五人の中、滝山瑄氏と豊田文三郎氏が師弟の關係から師に懇願したところ、南岳先生は袁士元の海棠の詩から、幼児を珠と見て愛珠とせられたらしい。

しかし今までは、最初の二行しかわからなかったこの詩が、この機会にいろいろな方のご好意で全部わかってうれしかった。

海棠の詩は次の通りである(書林外集卷二)

主人愛花	スルイヲ	如愛珠	ヨリケテ	海棠睡起	春正美
春風庭院	如畫園	花貌參差	玉人似		
袞衣曲逕	歩花影	主人吟賞	夜不眠		
翻々夜月	飛長裾	直欲題詩	壓蘇子		

三 倉橋惣三先生、愛珠幼稚園に來園視察せらる

昭和二十八年九月二十九日に、大阪私立幼稚園保育会主催の講習会が、四天王寺会館で開催せられ、講師として今は亡くなられた、倉橋惣三先生が來阪された。先生にはご病体とのことだったが、至極元気よく三日の会期を過ごされて翌日、先生ご夫妻を愛珠幼稚園に迎え、創立以来の保育資料や玩具等を整理整頓し、園内の施設配置等を視察していただいた。

園舎は明治十三年六月一日の創設当初から二度の移転をへて、従来の二園舎の欠陥を考慮して補うべきは補って、現在の所に、幼稚園教育施設として欠陥のない園舎を、特別建設して移ったのである。園内の広さは約五百八十六坪で広く、十坪の屋内運動場の高さは高く、玄関から広い廊下、保育室等も皆一面のように高さが同じで、区別に気付かず、木の香がすがすがしくて、新園舎を見に來た区内の人たちは、ご殿幼稚園といったそうである。それから約十二年の後、木造建築の火災を恐れて、倉庫のみを鉄筋コンクリートの堅牢なものに改築されたそうで、これをさいわいに、私は旧資料室をここに移し、倉橋先生にも見ていただいたのである。

先生は「よかったね!!」と一言いってくださったので、私も大変うれしく思った。

